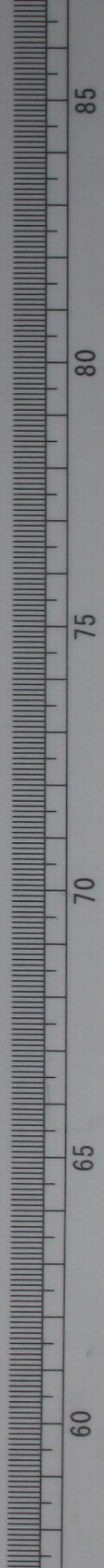




中村俊定文庫  
文庫 18  
279





桃

乃

鳥

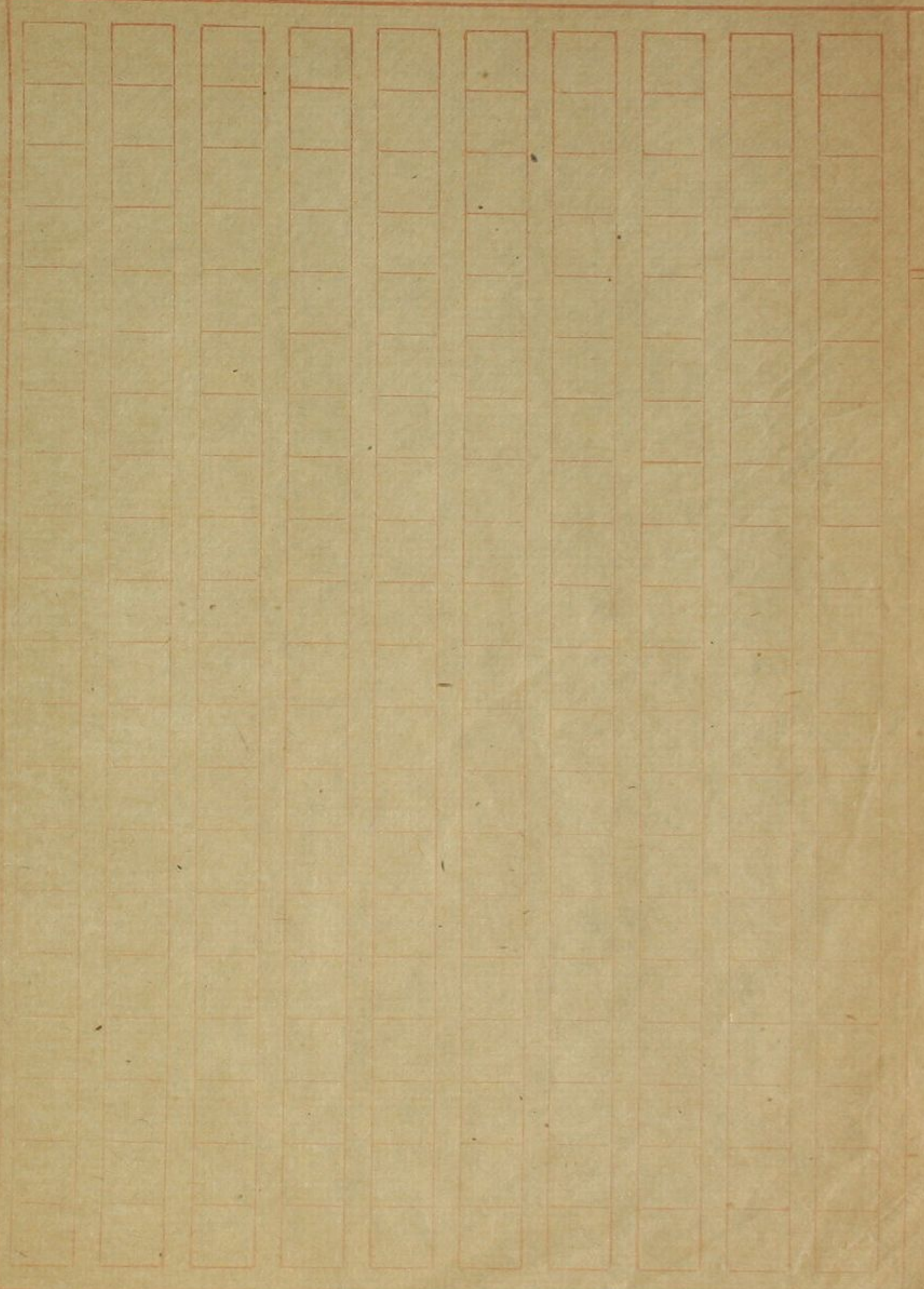
レ





序

武山に小鹿野ふる紫呈子はこといれ夏予か九  
 十九と目しるしる初て蕉風を野坡門に次  
 子号と百梅と改て此道を暮らんとたり。さる  
 ハ老師の奥儀せる物のいあつめ馬に鞭打るま  
 帰り四之林よ語は法師もくきりに道祖神の前  
 に噓つきららし霜よ笠のやつれをいふて菊水  
 寺の曉をいひつる草の交右をかさねて茅蘆  
 に仔細とさし中より梅子かれそみよまかするこ  
 とあり。法師の願もくしかにくて古翁に遺稿





を贈り一集は句ともふれかしと子む。

延享元甲子冬

洛下九十九庵

風之書

かけうよに 我肩ふに 紙衣かな 芭蕉

水やけしかに 走り 行音 曾良

松の歌いうとの あへもの 詠々へく 前門

身ハのりそあふ 猿のこゝかけ 四比筋

十六夜もをなし 名竹へ 帰るけり 良

心をかくす 物さりの 秋 蕉

萩原は 露にぬれても 面白き 筋

袖ふりはふふ 供に松明 門

之月近小袖は 綿もぬきあへす 蕉

路にる 髪をときそらへす 良

忘れりこふ人 ずも物くらし 門

細く書たる 文のやさしき 筋

盆をそらに 火燈とりまき 良

年寄いと 日待つとむる 蕉

もの香に 夏鍋をそ 吹にける 嵐



桐のたうにつ 其陰の家

川

旅車あくる東ハ 月と花

良

波ハ霞れ ふし を動うす

蘭

客呼んる 汐干なからのいか 鱈

蕉

犬に和ハるち 阿知のむと鳥

良

城比の初雪はるく みのぬすく

川

起る 火を吹く 鐘撞め妻

蕉

行のへり 迷子呼る 星月夜

蘭

理ん る こかせハいし也けり

川

山風はいくく 落る 粟はいか

良

黒木ふすへち谷陰は小屋

北 鯉

誰か娘と身をやまかせん 物思い

蕉

あら野は百合は涙かける

蘭

猿は番はあらる 夏は月

嵐 竹

水のいわやに佛さみる

川

夢をすす 諏訪は涌湯の煮ひり

蕉

おひねわひたる 関の打もの

良

何故に人の従者と身をさける

蘭

臍はすはれハ 鯛の浜境ハ

川

一門の花見の衆のさまくに

鯉



藤とつたふる  
~~藤~~政の筋  
竹

右に芭蕉庵云槍の一草

ふり此道に翁をくわ

んものあたまにま榎汰瓶の

蓋としすてめや

戯別辞

先師野坂 或時 いへらく故翁に密意あり

放下あり密ハ秘密の密ハあふ故ハ故の放

に非ず。日目を擧れハ山高く耳を倒れば水流れ

故たり。月に義朝に淋しすも花に七兵うお

かきさも我ニミ子にかくすことふし。後は一

線路なかうんやとふむ。後は一線路ふりさん

やと頼に杖笠を 暮雪窓の主人架呈

時は延享の弥王 咲いてゆく 水の

あたまにかふる日秩父山に霞を汲んで小鹿野原

の花蓮の風反れ一瓢をひろきぬ。予ハ何より

ままとはす 洛浪花の故人を尋せし

比子よ 後れ のしやを信べ れかしとつ



とくに申送れみ。

延享 元年

四之林

人

稿

小麿の明汗  
おのの川



待野涼眠貴信

唐々や

のはせしれ

えろ

葛

すまのをもとる道の目いりし

紫呈

鳥の声鷹も頭巾の 耳立ちく

才松

一日ものもいけ暮けり

可柳

近は の外ふる門ろかひ

紫格

かくはとこはす傘の雲

紫列

中くに 河豚にも れす月の反

如花

灯 ふたつに ちうつく

川音の下にふかまるの家の

如牛

樵りに成つて誰りおしのい



未買ふて

八 夕日照りこむ

紫竹

かゝくく 山門高き鳩の声

柳雲

にこふとぬ樟木芝

木双

比無身に咲く

紫吟

苗代守に白幣

送紫竹子

うくひすも添ふてや竹に 一千里

送柳双子

も

初旅の心空よりかかれ

かいせり捨てばさ

くもあし。よるを箱根

にまぬましよりそい

に春の夜の夢さめく

くしに首途は三をい

いあはせ侍

日本橋

おそろくは花の首途の日本橋

紫竹

京橋



京橋やはややハハに三々風

柳双

江戸橋

橋

に江戸の 波かほし

紫呈

千里鳥啼く酒旗石旗みさしに山部

柳の暖簾を映す さとあの鐘代声

はいつこの松原やさん こととまの浮島

か原の 五れは是柄足高くと遠くあふ

夕子近くうつふくほとと風

に入つおうくと原吉原の宿をも打

こいぬ

鳥飛

紫呈

鞠子の宿の春雨をいとひしにあふれ

昆布の煎茶は儲おうしく秋をか

板の骨を磨さむとさう ちやう

しにの あくれハ 二辨慶の とかけら

れたり

我まりや 我もとろハ 武藏坊

紫呈

嶋田に逗留して

花にくる 晚鐘もろし 石井川

伊勢にもあ



雨風の宮守連も 花見かふ

同宿の尾城の風人あうら

くけ紐は空輝もあうら 猫の恋

日表も 日裏も 百牛

奈良 紅葉のむまふ春鹿

紅葉陰鹿も袋の角 紫呈

紅葉うら秋 落さく鹿の角 紫竹

鹿の角 紅葉の 柳双

の 己へ黄昏る比 足代宿

いそぎに下りて也借らん 爰にや

寝むと同士 の く 四里れ

大坂のよりみ

あゝかにへはついけぬ

春雨やうすくさかりけ 紫呈

卯月初浪花は に出る

梅花風之 玉門のう

百梅の早と文

玉謝は

梅も我名に ふ時や木下園 百梅

武山に紫呈子 白梅とまをあふ



蔓もつゝ  
の生門に入らるゝを賀す

串  
の名も新うみせはりて  
真之  
百梅

朝  
遠かり来る鬼のむなかけ  
寺水  
真之

朝  
の寐をこれし  
月の影  
東山  
春路

未略

合塚  
勝曼攻つ下  
葉師堂境内

松陰也輝は時雨も  
百梅

碑  
東十橋寺町  
宝国寺内

ひさまつく墓ハ五月花は盛かふ  
百梅

行の寺よあそび

梅

ほろりとも  
静に自梅と  
葉子金と  
を語

賃せふる子安ハ寐せぬ  
鄭公  
梅徒

招くあとい風をとくれ  
扇かふ  
真之

淀み

持て手からこほりて涼し水車  
百梅



洛の九十九庵へ出て

幕とる 何れや 散松葉 白梅

声の尾を引 風之

の石棗倒れし門に 紫竹

一きめる 医者の二番目 柳双

末略

武山此同 如花ふる者ハことし

伊勢詣のわけうけく此 小も屢

来り風 の勅破もあつたるとそ尚

予のあつても せよ一 あり

・ 中松にかたわて のかけありき 如

柳双はソそくことあつて志きりし

滞りを促すまゝにまゝ逢坂の関の中

るまゝ送り出さ

見立るや 杖又山かと 雪れ奉 白梅

朝起もけふハかすすれ名に し 紫改 東鳥

氏神 小百梅子といふひり

賀茂と鴨 ありしかふ 風之

百梅

饒別 元師の法を 今送別のことハとす



見如某れ

朝旅とす、むる夏れ月夜かふ

風之  
文下

我も見て行く園に清水かふ

百梅

二輪目れゆかういさくで

水鶏のめとをく枝折戸

百梅

瞬

白髪反れ牡丹にふらむ胡蝶かふ

百梅

崩に

義仲寺

此巢よりきて浮せれ 夏うとり

百梅

帰路ハ五月雨の降りみ降らず汗

をくほりつゝす 旅寐にへぬハ紀

行の吟もおもひかけ事たとへあも

ことよりにたれハもにしつ唯三河の

ハ橋を過し時先師の吟をおもひ出

いとあはれろくハ

百姓の古き名もあれかきつばに

野坂



月 いろかきほと武山に帰る

まろつゝかばりを母に

夏旅の上坂 ぬ 母へ せせり

百梅

夏に匂ふ 袖の 橘

紫吟

入つといふ

旅心ありし

四之林の法師も をと、あられく

夜の閑談 もえらす

漬梅や紫蘇の錦よかへる旅

山よにふれハ風かほる軒

百梅

諸國吟

八景を一幕つしや 五月晴

角上

朝手水 足はたつや

梅徒

此木や伐らんけ子の

風之

涼くさや舟をかふる橋の影

加賀 希因

耳にふを

木曾 吸水

や今朝の花は 雪周より

洛 百川

蓮の葉よむまは落ても かな

重寛



夕立せあつさ

仙行

風に我仔折るかふけりるかふ

杜菱

猫も来ぬのかるさや更衣

鬼士

灌佛やけふあてなき寺参り

尾巴静

花に二日はらす芥子の花

埋然

咲かぬ野百合哉

一日ころもかへ

篝大や鶴に

人の園

螢の夜市哉

鳩 人はいふなりかんこ鳥

武柳居

や蒔におとこハ入られず

鳥醉

あそこも入相鐘れ雪の峯

森林の灯れ

かくれ表のもむすはぬ蚊やりかふ

涼しきをさへこけや沖の舟

撫子を笠にはさじや女旅

奥露竹

雷にふらぬくもりやほとしおす

紫列

水草の涼むるふや夕涼

紫吟



山氷の濁る時分中 紅楓

ヨシヲ

朝露にしろくは舞ふ雲かふ

百梅

寄百梅風子

夏山も名のかくれ氷や鹿の

式  
千梅

股引のかいおハニ見の浦つたひを

おもひ願に

笠の楯も

再びはり行ましに 秋も雁啼てまを

比ふらん 我を雲よそり出りてせ

と四之林より一を段せざる

いふしとかけ付けそり心を肉子に只

一 飄然とくを雲よ入らんとなり

也此春ハ予ハ上京ヲ首途を送る

の林に別酒を汲ケ今は杖父の草

むらう一露をくけつて袂をかたむとや

菊にいさ 鸚鵡かへしの別れ

百梅

山田もたらぬ 我は張生也

青き月ヲみたりハ星もふし

絮吟

お勝手かひハアこそ

如桂

袴も とも大のし 此しうけて

柳

松葉交りハ夕嵐 たつ

如千



何かに付く

かたまるぬ

可柳

志らぬ心の筑紫恩への舟そら

二月の雪の降りや降りや

柳双

庵室に榎張かよて

え花を待

如花

田行の後ハ 歌もあそびと

春浦

野坂門人の馬 坊此秋はそらに

と輝うあたらうのしとく浪花

おもむくよしふれハ

夜寒さそ 蘇馴る

や 淀の舟

柳

むさし野の

何百里

秋

蓮の実比 何とあはてや 飛又度

虫の音にも 油断ハあはし 任夜泊り

雪考

虫いろし 犬もあましや 草枕

庵中吟

三日月を て 虫しにり 秩父山

栗稗のくくらき先や 鍛冶の音

糸に成時 秋寒さ

柳かふ

百梅

田の の 秋から 砧かな



文通

丹後に官津を過る

沖は河原を渡る 秋の風

風之

筑前長瀬

先師の

いとよきるい

中庵は茶粥の 作つもの

袴着に

中九日の菊田

菊は香やとめを布きればしけり

三峯山にのぼる 折立丁

かすね着の錦や山のついで折

子を三日我山にといひ

三日月の中三つの尾上に一夜つ

孤洞

暮雪

月次畧

落栗や振むきかせず 牛の面

百梅

苔ふめしかき 露時雨降る

如花

月の出る迄と羽織をかきすれ

如牛

二秋も違ふ 暮おれとも

紫吟

暮秋

飛鳥の尾に

秋の水

初冬

一夜さ

あいて落葉かふ



去因の もすてい四之林

銭別の雅遊を催さるしりー昔来

んハ如牛春浦のニ子を伴い出ぬ

道一里おかしさんしりー中初くれ 百梅

午二日

こぼすぶと菊の



吉田 銭別 別去路

見送るやうしりーれ声の届ます 繁松

風おしりーなる冬あけほれ

飛石に

唄のもふとぬ 哥れ

口上は道

未相い一つ水おたまりす 涼波 東門

の露ほしりーと月の影

里れ踊は夜しりーふても

全



詩心鶏鳴いて 橋に霜 寸松

たしむ木は葉は匂ふ 銭別

一丁のどしに 料理工夫して 琴之

合

行先は案内ハいふぬ 落葉うふ

冬をまかふふとんさ一

百梅

とれたかみくぬ 濱の人声

陽関曲

首途の掃除加減や 朝時雨 柳堂

行人はこもこもりあり 冬柳 森秋

落葉焼いて 更に一盃はわかれ哉 松吹

西のかに箱根 富士の雪 花束

送

枯芦や汝にまのすふねのうらみし

雨かみりれう 廊 然無

人々に行の風雅をうき  
まじこころの親交を謝して

かきし 瀬も見す 吉田川 小倉野川

神皇月未は三日月を東の に



のしるべある東門子を送へ

し品所の かねてはる旅すかろう

ける

鴨に羽も中く おもしろ

川崎とやとる此家にはいとへあうるに

夜 のありとて人まよほりく夜も

すみ森 つけす世とあうかゝ迷惑とい

かゝることとをいふ名あふん

を砥つにははるしも 寒かふ

小田原

水風呂へ足高山に 影をし

三島明神 宮いと古いて

是ほとれ神も勸化れお留 かふ

落葉して神へ せきりやうし

井奥竹取の二風 表すへを

侍におも白 の名村 とにとぬ

玉市場

井奥 便を久く

千鳥 けとある六伝を 十七字

田子の浦辺 ともえふ



浪も かへして小春かふ

いとくいで面白き所と聞てハ風人

誰に手と引合いて森島は星不

る宗二法師は跡を尋ね

の西行 雪 の何から出たる木目かふ

墨跡 踏浦ぬくくればあやとや 妙子

富士 富士よりも遙に寒し 石川

橋 かへり咲も読人よもは 一二輪

夕菜も 才紅葉は小春かふ

猪小屋 古今も聞かば猪小屋は冬巻

西行 比庵も更に宗二は 時雨かふ

宗二の名称に高し或時ハ猪追は

小屋か入て推敲くり

かくて見ろくくくく米軸を結はんと

すれハ想風吹いて富士へ見す

暮ぬさうはとくふし川にエ手つにい

に私國も青子にありしアせんとう

まよ一花大腫に見ハや富士の

病中 葛子の旅 ぶく

に降る 落葉や物の出 らす



我も痛所れけりて

まやとりを流人の日夜を来り

別の日

うかり足見せり首途に 霜柱

薩埵越

伊豆山や 井のうらとを吹もてす

今朝迄も 見えし富峯はいづろ

行けし さいとりにる 清見寺の

鐘ハ三保の峰を うちつて

くときせくる波の音いづろおとろけハ

今宵は誠の津津やとろりける

を れハ府中の布雪 と訪

一細工竹にこのまむ 打しふれ

の下の降出  
けれハ其風を成りて

一細工竹もうふつく 晴雨かふ 布雪

是さへ竹に 一手際

送るまてあつかる 泡りあれ哉

其花ハ畑に見せり 朝茶かふ

くつろほくあそへ 冬屋の夕日影

場雪



寒菊の行 八頁てやとりかな

友より門の細きにあまはする

あまはするあまはする

冬枯や 下ればは ますも

我もいさからんあらしは雪見笠

途中の吟

掛川の宿を出れば 峯盡成雪

夜時雨や忘れて行し 峯の雪

けふハ心ゆく晴れと折も濱松風の吹

くまの舟の舟あや 此夜ハ二

河はおほつかりきやとす

八橋を尋るにおも 一は涙も落す

此寺に おもくを旅人に見す

をいさく 寒さかふ

尾城の如是庵と 風程のやと

を受る

今宵月もすまじくす 冬り庵

の風をかきふ うつみ犬



希に此月見や枕肥の花の陰

草庵

を けと あらふまあましかふ

のふ屏風の繪もうまね鳥

此月も我も行き ち入るとひて十日

の飲を庵中にまはむ

やとり木や いらて雪の花

如是 伴て我を

熱田 雨 ちく送らる日既西山に

落人とするに名を舟より振えハ水

遠山 其人も見す成りぬ

秋父改東に 四五人神合ての

隅に するを ハそろうき舟中

の柳にふれては ふらぬ空たつりし

ふおほ くれし

帆にあらる風の寒争えりまぬき

と おく人はうらやましけれと良



寺の鐘ハ

子ノ刻ハうゝに

おもひあま

如是庵比火屋も

天橋

七景ハ

義仲寺

鴻行もかくこそ

九十九庵

生と師在命のむ

稚夫いと

ほの

脱てふへ

をく

茶釜の煮れ

かき見れハ

繩の影は

冬

冬

風之

オキナリ

はくこい

し

すめす舟の中

比良の雪

夜深き

鳴の

今まの

の

風見の

の

の

積る

張

にゆる

なり

の

の

風之

風之

之



市町にころんでいさや冬こもり

梅子

武の百梅 風雅の味を文通すも

寒梅や文余の秘もいといねり

風之

佛達 となうハ 春近し

文通

戸比ふまや思ひ出さる人の顔

百梅

目の留ま やいつこ 冬木立

琴之

寒菊や

麦時や朝奈れ ちとりとめす

信濃詣ハ半、紅れそ

如千

初雪の比 もりせそや 下り舟

尾 未春

後の世の毒と夜く くすり喰

木り下ハ 野 落葉かな

空せみや花に咲 の淋しさは

芭

相模 の名もあはれなる枯野かな

寒菊や蜂に吸はるゝ 骨をじ

武 豆

雪れ日や山に帯し

柳下



初雪や妻か

のつくね

梅徒

冬とまり

をいひあかし

風之

早春葛子れ行脚をおも

陀やまに日本の中よ花の春

百梅

春

云はせす嫁肝入りや

風之

にまたとけし残りや、雪の影

文下

八仙飲の神遊いに

鶯の初音を一つ

て見る

うくひすの木魂はふれて初音のふ

百門

人日

浪花の  
会う塚にもふす 乙子、侍を

念珠くむ手は橘の匂かな

梅花房に去るとこころの親交

をむす侍

舟の上 時ハ此 梅のものと

たつる 幾里の春

梅徒

後序

百梅ありしか よまた葛坊 をがけ

の鳥なる一集と はふりぬ 園中深く曉の香爐



に	ふ	や	め	る	と	の	甘	か	つ	い	く	道						
す	る	人	ハ	世	ハ	阿	房	と	も	さ	か	く	め	と	祇			
園	の	を	抱	て	春	の	く	る	ハ	を	惜	々	難	波	寺	の		
塔	の	に	か	へ	り	ま	り	橋	を	く	の	ハ	ん	こ	そ	生		
涯	の	働	か	ら	ん	蕉	翁	と	坡	師	の	道	を	あ	と	も	と	う
く	え	後	に	矢	ま	出	れ	結	語	す	る	も	の	あ	ら	し		
延	享	丑	親	月	日													

梅房

武列秋父小鹿野

山田百梅撰

京都寺町五條上

額田正三郎梓行



